

精神的孤獨に就いて

ルネ・カナ

須川, 彌作

<https://doi.org/10.15017/2557030>

出版情報 : 文學研究. 20, pp.84-111, 1937-08-07. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :



精神的孤獨感到就いて (承前)

ルネ・カナ
須川彌作 譯

この利己的な精神的孤獨の形式は、世紀の兒の心に多かれ少かれ浸み込んだ。人々は感情の無力にして無限を抱擁するに至らざると共に、想像力も薄弱にして新に夢の世界を作りなすことが出来ないのを知つた。ロマンチズムを嘲弄した場合のフロベールはこの事實をよく見てゐた。人も知る如く、この卓れた人は獐犢なる憎惡の念を有し、特にロマンチズムの人々が藝術を犠牲にしてまで熱情を支持したこと、即ち彼の陽氣な戯れに稱して、「あらゆる種類のH」を有する「H H Hamour」の下に藝術を屠つた事を許容しなかつた。この善良なる巨人をして多くの眞理と嘲罵を云はしむるには、會話をルネの血統をひくものの上にもつて來ればよい。ミッセが特に彼を激怒させた、即ちその書翰集はいかに巧に彼がミッセの惡口をいつてゐるかを我等に見せてくれる。(後の第五章參照)。そしてこの故に疑ひもなくボヴァリー夫人はファンタジオに似てゐるのである。ファンタジオの孤獨なるはその心を浪費したためであり、又ボヴァリー夫人のはあまりに空想に耽つたからである。二人共、感受性及び想像力は一時は魂を昂揚させる

かもしれないが、そのために不用意にも同じく激發されて起る無限の渴望を癒すに無力であるのがわかつた時は既に晩かつた。ファンタジオは情熱が情熱の上に崩れるのを感じ、ボヴァリー夫人は彼女の夢が「傷つい・燕の如く」に墜落してゆくを見る。心情は必ずしも感情を更新出来ないであらうし、想像力が新しい事を創るとも限らない。とにかく魂を満たすに急なれば、魂の限界はすぐに見えて来る。そして何れも正しく同じ種類の孤獨である。

次いでフロベールの小説は大體に於て（作者の態度が）非人情的であるから、明らかに人物の精神的孤獨は著者に對しては何でもないし、寧ろ變質者の女性や『感情教育』の中のあのフレデリック・モローの如き落伍者の屬性となしてゐる所から見て、フロベールがかかる感情を殆ど一顧もしなかつたことが示されよう。

その書翰集の到る所に左の如き文章がある。

「母への手紙」（一八五一年）「居ない人々の事は忘れ勝ちだと仰しやるが、そんな事は何でもありません、魂の交渉といふものはそんなものです……古い共感のおかげで人々は感情の通じ合ふことを信じてゐますが、そんな事はありません。人々は自分がその必要があれば感情が通じ合つて援ひの手となるだらうと思つたりしました。ところが（今は）親しい人の耳にでも、最早あなたの言葉は通じないとも稱します。男から男へ、女から女へ、心から心へ何といふ深い淵でせう！」そして又「凡ての物は一つ一つ何れも無限のものです。いとも小さい石と雖も人の思慮を惹きつけること、恰も人が神のことを考へるのと同様です。二つの心臓を重ね合つて鼓動させても、そこには深淵があるのです。命も何もかもそこでは空しいのです。魂は何も出来ません。自身の寂寞も破ることが出来ず、ただ寂寞と共にゆくのみです。沙漠の中に迷ひこんで如何ともならないのです……」（「ある友へ」、一八五二年）、そして又「私はど

こへゆくのだかわからないが、果しのない寂寞の中を歩いてゆくやうです……」(「G・サンドへ」、一八七五年)とも云つてゐる。かかる歎きの反響は『聖アントアンヌの誘惑』の中にもある。この隠者は大きな宇宙の中に迷つてしまふ。彼の感性、智力、心情も何にもならない。凡てのものが彼の前を通つてゆく。いろいろの形や、物が行進してゆくが、これは人を瞞す幻燈である。アントアンヌの信仰する神すらも、他の神々と共に消え失せる。眞に残るものは科學だけであるが、科學は魂の深い所までは入つてゆかない。我等の周圍には堅實な現實はなくて、永久の幻影である。だからアントアンヌは孤立した人であり、だから、彼は自然の中に融合し生きとし生けるものに密接に結び付き度いと夢想するのである。(一) フロベールの孤獨は哲學的意味に於て宇宙と向ひ合つてゐる、そしてこれは又同様に彼の輕蔑するブルジュワと、藝術家の孤獨との對立である。フゲ氏は彼を「閉居してゐる文學僧、但し少しく癡猛な所あり」と評したのはうまい事を云つたものである。彼は人間を輕蔑してゐた、そのために彼はその殻の中にもぐり込んでゐた。然し輕蔑しながらも彼は人間から眼をはなすことが出来なかつた、即ち彼は人間の愚かしい意慾と苦惱を有し、又同時に自己の孤獨の喜びと悲しみを有してゐたのである。ただ彼は驚くべき勞作能力を持つてゐた、一度、書き上げるべき作品に眼を据ゑると、彼は他人ほど人生の孤立が感じられなかつたのである。とはいへ、彼のかかつた病、藝術家のこの孤獨は、他の人達にも感染していつたのである。故にこの點から見て彼は人類の珍らしい見本である。

註 (一)

「私は飛びたい、泳ぎたい、わめきたい、吠えたい。翼があるといいのだが……永い鼻があるといいのだが……物の奥底まで降りてゆきたい、物そのものになりたい。」

(11) フゲ氏『フロベール傳』Hachette 版。

ルコント・ド・リールは哲學的、特に宗教的孤獨をいひ表はした點に於て、又人類の一つの見本であるといへる。孤立はヴィニーの作に於けるが如く、ルコント・ド・リールの詩の根柢に横はつてゐる。『夷狄詩集』(Peuples Barbares 一八五九年)を作らしめたものと『運命』を作らしめたものとは近い。そして人々が兩詩人の名を結びつけるのは理由のないことではない。ルコント・ド・リールの、生きる上に黙々として、苦痛に超然た然とする意力の裡には、何かしら高くとまつた所があり、この態度に類似のものを求めれば、まづヴィニーの傲慢に沈黙を守つたそれであらう。二人ともしつかりした魂を有してゐたから、生存の悲慘に面しても一種のあきらめを自ら作り得たし、又自尊心が強いので、自らを苦痛よりも強いものに考へようとしてゐたことはよく似てゐる。多くの人が絶望の叫びをあげて倒れる際に——而もこれはロマンチックの人が皆なした事であるが——二人は信仰の動搖、同感の破滅、詩人の心にとりて特に苦い日常生活の困惑の裡にありながら努めて平然として心の激動を外に表はさなかつた……この點では、ルコント・ド・リールはヴィニーより成功してゐるやうである。とはいへ彼にそれだけ感性がないといふのではない、彼の中には稀なる價値を有する抒情詩人があつた。ただ彼は悲歌を作るに當つて、好んで時の経過がその悲哀の苦味の上に働きかけるのを俟つて手をつけた。そしてこれがヴィニーであると、まだわなわなとして生々しい悲哀に象徴の衣をやつと被らせて我等の前に供するに反し、ルコント・ド・リールにあつてはその苦惱も感受性のやさしい、目立たぬ動き位なものにしてしまふことが往々である^(一)。

註 (一) 私は往々といひ、常にとはいはぬ。ルコント・ド・リールには又ロマンチズムの作家の傑作に見るが如き波動の永

い、かなり波瀾のある一種のリリズムもある(呪、尸躰、死へのはげしき渴望、虛無主義)……そんな例は一つならずある。然も其他の點では、差別はつきりしてゐる。ルコント・ド・リールの悲歌は苦^にさ、をのきといったものがない。

彼はラマルティヌ風の孤獨、流謫の地に恩寵も詩も知らぬ、神を殺すものである人間に交つて生きる苦痛を知つた。彼としては人間がその近くに神を感じることの出來た世界の初めの時代に戻り、若き人間が若き宇宙の中に成長してゆくを見たかつたのである。彼は目映いが短い幻、夢の最もかなしい、よいものであるエデンを愛惜するカインである。彼の想像力は彼を失つた樂園の方へ連れてゆき、その景色、美しさを見せる。そして彼の心がこの思ひ出によつて落ちつくと、その孤獨も亦和らけられる。この過去への復歸が錯覺であらうとそれは間ふところではない。昔のエデン、今日の地上、何れも夢の夢ではないか? かくて流謫の歎きは、喜悅の讃歌となり了り、嘗て人々が遠き樂園に對して有し得る限りの最もよき、最も優しい思ひ出となつたのである。

おお、イアヴェの園よ、^(二)エテンよ無上の樂園よ、そこの神草の上にイウは好んで座せり、

おお生ける香爐なる汝こそ

夕、日輪のもやの中に泳ぐころ

その數しれぬ聖餐杯の中なる清き香りを彼女の方に吹き送る。

棕櫚の下、無心に眠る美しき獅子よ

森の中に遊ぶ鷺よ、雀よ

聖なる河よ、又、靜けき天上より

我等が許に下り來し汝、妙なる聲の天使よ

吾はいま、最後にあたり汝をたたふ。

註 (一) 「人間の終り」。この詩の思想は非常に悲觀的である。アダムはあまりに苦しみ世の重みに堪へかねて死を希

ふ。而して果さんとする時に當り、彼は未來の後裔が叫ぶのを聞く

我等は汝の刑罰、汝の血統なり、

死せよ、我等は生きん！

尙かかる詩に於て、エデンの描寫は一脈の清新の氣を與ふるに力がある。

人間は時を経てこの最初の時代のエデンを探し當てたらうか？ 人間は最早、樂園には花々しく復歸するとは信ぜられないやうにルコント・ド・リールには思はれて來た。橄欖山のクリストの如く苦しみ惱む人が神を求めて眼を上けても何にもならない。ルコント・ド・リールは神々は夢であり、この夢によつて人は永い間その孤獨を紛らして來たと信ずる。かくてその最後のもの、最も愛されたナザレ人も他のものと同じくなりゆく。苦しむ心の歎きに對しては、又信者の切なる祈りに對しても天の高き所よりの答はない。而して、ヴィニーについて、ルコント・ド・リールは魂の宗教的孤獨を繰返して述べる。

ナザレ人よ、「時」の挑むままに

かくて二千載にして一の神は消耗せられたり。

而もその灰の中には何等生れ出づるもののごめくを認めず。

未知の力を豫感し、

精神的孤獨感に就いて(承前)

現れざるものなるを、待つ心のみ逸りて

おお、ポールよ、汝こそダマスの道にて

雲よりほとばしる思はぬ電光に出會ひしなれ、

我等が夜は尙暗く、晝とて又遠し、

いくばくの嘔り泣きの孤天の下に失はれしことか (二)

註 (一) 「呪咀」。第六章ルコント・ド・リールの三つの宗教的態度參照。

この詩の中には確かにヴィニーに於けると同様に激しい絶望がある。然るに詩人はその宗教的な悲慘を他の苦惱と同様、努めて抑へようとしてゐる。假令「狼の死」(一八四三年)が「夜の冷き風」^(三) *Vent froid de la nuit* の中の數行に寄與してゐるやうに見えるとしても、叫び聲も放たで死にゆく傷つける狼のストイシスムは彼にだけのものではない。若し訴へることなしに苦しむのが大きな魂のなすことなら、苦しまないことはそれに勝らう。即ち絶望は傲慢と同じく空しいものである。^(四) ルコント・ド・リールは永久なる空虚の哲學によつて、安心の地に到達した。次いで彼の魂は歴史の示す所により、神々がつぎつぎに現はれては消え、その度毎に信者の心に悲慘なる思ひを起させるのを見るにも馴れて來た。彼はその苦惱に何等例外的なものないのを理解し、イエスをまづ神のパンテオンの中に敬々しく安置して十字架上に於けるその犠牲を讃へ、次いで今は亡びた諸宗教の信者に同情を寄せた。^(五)

註 (二) 我等は神への熱情を捨てたり！

……今後は如何なる神のために麥と鹽を燃やすべきか？

破壊せられしいつれの祭壇に神祕の酒を注ぐべきか？

(二) 無關心に満たされし、物に動ぜぬ心を

己れに有する者は幸福なるかな。……

いのちはこの陰鬱なる心の周圍にをのくも益なし。……

(「サン・ジルの峽」)

(三) 云ふを止めよ、天は耳を傾けず、地は汝を嫌惡す、

擧されざればかくも涙を流して何するものぞ、

死にあたりて、血のしたたる口に、刀を嚙み、

もの云はぬ傷つける狼の如くあれ。

(四) 力、誇り、絶望、何れも虚榮ならぬはなし。

(「サタンの終り」)

(五) 汝は聖堂の残骸の上

鉛色の顔色をなし、額に花を卷きて

狂ひしサチュルヌ祭の群の飛びかかり

その笑ひ聲もて汝、神の惱みを嘲るを見聞きせん。

汝の來りて座せしは、古の汝の同類の後をうけて

赤き永き毛をもち、汝の純なる青き空の下なればなり。

神祕なる鳩の群なす魂は

汝の、神の唇に來りて露を飲まんとす。

精神的孤獨感到就いて(承前)

かくてローマの權力の誇らかなる時にも

盲目に、叛ける世の終りにも

人類の、時と、永遠のうちに泣く限り

汝は欺かざりしなり。

(「ナザレ人」)

そしてルコント・ド・リールの自然に對しての孤獨をいはうとすると、またヴィニーに戻らなければならない。さりながら「リヤームの泉」*la Fontaine aux Linnées*の中には「牧人の家」の中にと同じ感動、特に同じ苦みを見出さない。ヴィニーは自然を嫌惡する。自然が我らを輕蔑するからである。ルコント・ド・リールは自然の輕蔑を一つの掟として受け容れてゐる。「掟の實は死し、人は落ち……」と死に臨んでハロルドが云つてゐる。呪つて何にならうぞ？ 自らを慰め、特に感謝のこゑを放つ方がより賢い。自然は無關心であるが、美しい。その靈は閑却して、外形だけを讀へよう。歴史家の態度を以て諸宗教を味はひ、藝術家として自然を理解しなければならぬ……ルコント・ド・リールはこの無關心さをあまり永くは呪つてゐられなかつた、その美しさに魅せられたからである。自然はいかに人を輕蔑してゐるやうに見えても、彼はなほそれに敬意を表してゐる。彼は自然が「匂つてゐる」^(二)といつて歎いたり、その眼に向つて「他の所へ視線をすべて轉ぜよ！」といふやうな人ではない。彼は自然の美しさを神聖なものとしてゐる。

やはらかい匂ひは潤された植物から起ちのぼり

私の心が話しかけた聖なる自然の方へゆく

汝の神々しい、蔭の下、微笑のためいきに、

明るい波の唄を聞きながら休らふことの樂しさよ！

.....

汝は疑ひもなく黄金なす海の岸には生れなかつた

そして汝は神々しい、棕櫚の下には育たなかつた

註 (一) 森は匂ひ高いその蔭に

何ものにも潤れない音楽を奏でながら

私には耳傾けず、その無關心な光榮を靜かに搖すつた、

人々が苦しみそのため死んだりするのも知らないで、

..... 自然は人間の苦しみをあざ笑ふ.....

(「リヤーマの泉」)

(二) 汝以前には、私は美しく常に匂つてゐた

私は風の吹くままに私の髪の毛をすっかり任せてゐた。

(「牧人の家」)

彼は自然が苦しめる心に注ぎこむ意識しない靜けさあるために自然を愛する、^(一)それ故に壯麗なる森にあつても生きる悲しみを慰められないで死んだ人を泉の中に見つけて驚くのである。

註 (一) おお清々しき森よ、原始の清澄さよ、

精神的孤獨感に就いて(承前)

おお歌を歌ふ木の葉を撫でる風よ、
その喜べる波に光のたはむれる泉よ、
緑の丘に花さくエデンよ！

私は敬ふ、おお静かな平和よ、そして汝、清らかな息吹きよ、
また汝、空と木々の枝から降つて來たもの、
心の休息、喜びと苦痛の忘却なるものよ、
私は敬ふ、おお我らの惱みには閉ざされた聖殿よ。

ルコント・ド・リールはヴィニーの一段と穩かになつたもののやうに私には見える。彼が殆ど何も語らなかつた「愛」は措かう。⁽⁻⁾けれども「呪咀」*Anathème* は「橄欖山」を思はせ、「リヤヌの泉」は「牧人の家」を思はせる。ルコント・ド・リールの比較的な静かさは何に由來するのであらうか？

註 (一) 二三の作、*l'illusion supreme, le Maniché* などの中に於ては例外。これらの作については後に語ることがあらう。

人は「牧人の家」の結末にある夢を思ひ出す。詩人はその女の友を誘つて車の家に乗らせ、共に世界をめぐるゝとする。「物いはぬ大きな國々が長く擴がるであらう。」彼はまたこの忘恩の大地にあつた亡き人々に共に思ひを走らせることをその友に求める、「……我々はすべてが暗い時に彼らのことを語り合はう。」この鎮靜の夢、ヴィニーが描いたこの二重の夢、これを實現することになつたのはルコント・ド・リールである。彼はその眼の前に「默せる大

な國々」、印度、ギリシヤ、壯大なる熱帶、雪のスカンデナビヤなどの、大きな景を擧げてみせる。……そして特に彼は、死んだ人、亡くなつた民族、印度人、古代ギリシヤ人、に思ひをはせ、彼らの生活、彼らの魂に興味をもつて彼らの眠りをさまして歩いた。……少しの平靜が歴史及び歴史によつて彼にもたらされる。

高踏派の時代にあつても、かかる孤獨の苦惱によつて、人々の魂がどれ程までに苦しめられたかを證據立てるものは、一八六九年に出た詩集『孤獨』*Solitudes* である。かなり特殊な數篇を除いて、^(一) シュリー＝ブリュダム氏のこれらすべての小さな詩は、人間が苦しむ種々の孤獨を特徴づけてゐる、それは人間の感覺と理性との最初のめざめに始まり、「老年」*Veillesse* に至るものであるが、詩人はこの老年から鎮靜を期待し、またはこの上なき孤立として「臨終」*Agonie* を恐れてゐる。^(二) 彼はあまりにも幼くて寄宿舎に入れられ、「沙漠の如き寄宿舎の寢室に在つて」母親の愛撫を得られないために枕の下で啜り泣く子供達の悲しみを述べる。又此の度は、壯大な冬のサロンの中、或は豪奢な夏の別荘に、子供のないためつまらなく日を送つてゆく富める婦人の孤獨や（「彼女等の一人」*l'Une d'elles*）。——「モイーズ」を思はせる、天才人の群衆中に在る悲哀や（「海」*la Mer*。又は「人々が遊ぶ」*le Peuple s'amuse*）。——樂園と理想への思慕及び一種のラマルテイヌ風なる流謫の感情（「しるし」*le Signe*）や——その夢を實現し得ずして、向上の努力をなすに拘らず常にブルジュワ生活の凡庸なる所に陷る藝術家の孤立（「劫罰」*Dannation*）などがごちやごちやに出てゐる。確かに、此のまじめさの或るものは少くとも我等の知るところである。にも拘らず、之等の小詩は、その鋭き精神分析と獨創なる象徴とによつて、常に新しさを有してゐる、例へば、いはれなき喜びに突如として心滿たされて歡び、この喜び去つて俄に襲ひ來る寂寞の苦き有様を描いてかくも繊細を極めたる詩人は他に之を見出し得ない。

私は、掴みやうのない異様な魅力の下
朗らかなる心をもつて、時折、日がさめる

.....
この瞬間的な喜びの光よ、

人の目にはちらとしか見えぬ程に開く此の樂園よ、
幾年の夜の中に心の底をいよいよ暗くにしてゆく
この名のなき星よ、いづくより来る？

恐らくは、轉々としてさ迷ふ幸福の

ある人の心に納るを、誤つて一瞬間、我等が心の中に光つたのであらう。

註 (一) 「大きな道」、「白鳥」、「ヴェルス」、「地と森」。

(二) 家畜の番をしてゐる私のあはれな乳母を

捜しに行つて下さい

そして、素朴で、單調で、言葉数は少ないながらも

心を打つやさしい曲

昔の曲をその口から極く低く

歌つて貰ふのが

死に臨んだわたしの望みであると

云つて下さい

.....

私達を二人だけ残しておいて下さい

私達の心は一つになるでせう

彼女は私の額に手を置いて

ふるふる調子で歌ふでせう

その時彼女は恐らく私を常に愛する

ただ一人の人でせう

そして私はその祖母の歌をききながら

幼い日の方にゆくでせう

然しながら、魂の神祕なところをかく美しく見せてくれたけれど、シュリーブリュム氏は、後、その『空しき愛情』 *Vaines Tendresses* が示す如く、ここでは、まだ、特に戀愛の詩人である。ルコント・ド・リールにあつては、孤立が戀愛から生じる悩み以外の動機から起つて居るが、『孤獨』の詩人にあつては、婦人の極めて特殊な不安、及び戀を愛するうちに、あらゆる心の孤獨の細かな記述があるのを感じられる。即ち自分を愛してゐない人の事を思ひ切ることが出來ず、たまたま愛してくれる人がゐても、疲れのせゐか、嫌惡の情のためかで、その方へ心が往かなかつたり（『ソネット』 *Sonnet*）、又は非常に熱烈な愛の後、年が経つにつれ表面は落ちついたやうな氣のもの、心の奥では常に昔の悲しみを泣いてゐたり（『鐘乳石』 *Les Stalactites*）、又は、自分を愛してくれさうな女をこの世に捜すに生涯を費ししかも見出し得なかつたりするのである。

註（一）「追放」。

私は愛する美しい人をあとに残して

精神的孤獨感に就いて（承前）

流謫に赴く人の身の上をなげく……

されど、そを思うて泣く愛人もたぬ身は

假令、その身故國にありとも、更に悲し、

あゝ、日夜、己が家の中に

なくてはかなはぬ愛する人を捜すことよ

境は少くして、孤獨のみ多し

然り、これこそは最惡の追放、祖國に在つての追放

……生れし土地へのやさしき愛情が

共に在らぬ人をいよいよ、心になつかしきものたらしめ……

この最後に擧げた孤獨、その對象物を見出さぬ心の流謫は又、この詩人によつて我等の魂の掟として述べられてゐる、その心理は早くも愛の形而上學になり了つてゐる。相似たる、或は相理解する二つの心といふものはない。愛は時折、打ちとけてもいいといふやうな希望を見せるが、之は全くの幻影である。といふのは、愛人の何れもが、早くも——あまりに早くも——その獨立とその孤獨に復歸するではないか？⁽¹⁾ そして戀愛に就て眞なることは、あらゆる人情についても眞である。魂が相近づくことは決してない。この哲學は「銀河」*la Voie Lactée* の中に見事なる象徴として現はれてゐる、即ち

星に、私はある夜云つた、

「君等は幸福さうでない」

.....

星が云ふに「我等はひとりである

我等の何れも、君が近いと思つてゐる他の姉妹とは
非常に遠い

だから、すつきりと、愛らしい光も

その所では見る人もない」

.....

私は彼等に云つた「わかつた

君等は魂に似てゐるから、

君等の如く、魂の一つ一つは、

近いやうに見える姉妹とは遠く輝き

永遠の孤獨なものにして、夜の沈黙の裡に燃える。

註 (1) 「遠く」 *De loin*.

私は彼女から遠く生きてゆく苦しみを受容する

.....私は望みなく彼女を愛する、あたかも星を愛する人が、

星は無限なるものに屬することを感じてゐながら、愛する如くに。

この最後の詩にはシュリー＝ブリュム氏の詩才の特異なものが見えてゐる。星は明らかに孤獨な魂の象徴であるが同時に、そのもの自身として詩人の興味をひいたのは、星も亦魂であるからである。非常にイデアリストである詩人は、彼を取りまくものの凡ての裡に魂を感じる。(「古き家」 *les Vieilles Maisons* 参照)。かくて、この時から、この

生き生きた自然全體は、彼には孤獨に満たされたもののやうに見えて來た。彼はあらゆる者、無生物にまで、孤立といふものを推し擴けて行つた。尤も愛情のある彼は無生物にも、生命を與へてゐるが。彼の心はヴィルギリウス風である……

註 (一) 親しき聲がその中に眠る

又大慶臺の墓には

父なる魂のいぶきが

いま尙その古きひだを動かす

この故に、古き家屋の殘骸を

燐にかける時、燃木の

青き光の中に、魂の燃えゆくが、

夢みる人には感じられる。

彼は『孤獨』の一つの中で、人間は、肉體を結びつけば、魂も結びつくものかしらと考へてみた……がそれすらも彼にはつまらない夢想としか見えない。母親は息子を接吻するが而も彼女にはつきり感じられるのは息子は生れ落ちた時から母親と離れて居り、母の愛撫も息子を母に付けることにはならないことである。二人の友は抱き合ふが、そのために魂が一緒にはならない^(一)そして特に愛、愛人の戀、肉體の愛は心を近づけ合ふことが出来ない。

Et vous, plus malheureux en vos tendres langueurs

Par de plus grands désirs et des formes plus belles,
Amants que le baiser force à crier : « Je meurs ! »
Vos bras sont las avant d'avoir mêlé vos cœurs
Et vos lèvres n'ont pu que se brûler entre elles.

註 (一) 「愛撫」

おゝ女よ、君がその腕に君の最も純なるもののかたわれなる
子供を抱きしめても何にもならない。

子供は子供であり、恩を忘れた者である、もはや君自身ではない。

そして、決して、決して、君の所へは戻らない。

君は子供を生んだ日に子供に訣れをつけてゐる。

友よ、君等の抱擁も空しい、

視線を深く交し、手を堅く握ること、いづれも空し。

魂まで道は眞直にひらけてゐず、

ああ、心を掌中に納め得ず

眼の奥に、無限の思ひをこめることがない。

(参照、) 「肉体と魂」

(前略)

精神的孤獨感に就いて(承前)

幸なるものよ、胸、血の通へる胸

そのときめきは、聞かれなむ

.....

さりながら、憐れむべき魂よ、そは

相觸ることなくして、厚き硝子の下にはげしく

燃ゆる燐に似たり。

曇りて透明ならざるその牢獄より

呼べど益なく

互ひに親しきものなるを知りながら

相交はること能はず。

之等の句は、ギョ・ド・モーパッサンの小説の題辭にそのままならう。これは正しく『モン・トリオール』や『ある一生』や『我等の心』の根柢をなす一種の精神的孤獨である。

いま、ここで小説家モーパッサンの一般的研究をしようといふのではない。私は單に、彼が必ずしも好んで常に卑事を語るがつしりした者ではなく、又その卑談の中に時折病的な、不安なる肉感のあるを指摘してみたいと思ふ。特に凡ての彼の小説の奥にある肉體の愛は、ゾラ氏の得意の、勝ち誇つてそれを自己のものとするのではない。モーパッサンはシュリー・ブリュム氏が「愛撫」の中に示したのと正に同じき精神的苦惱をそこに入れてゐる。眞率なる一致、心地よく自己を投げ出して信頼するものとされてゐる戀愛も、彼には、宿命的な孤立が、對者を所有する際にまで感ぜられて、心の期待を欺く、當てにならない神祕の如くに見える。かくして肉體の愛は、彼の小説の中では

奇異な價值を示してゐる。即ち、凡ゆる愛の苦惱は人がその愛する者の心まで入つてゆくことの出來ぬのを、無情にもはつきり確かめさせられた結果であり、一時の激昂によつて生じた熱情は、早くも衰へて激しい絶望となつてしまふ。志す所は一つの魂となり切つてしまふことであるが、眼前に在るものは常に、二つの見知らぬ人であつた。モーパッサンは屢々、人生に於ける二つの魂の距りの遠さは、天空に於ける「二つの星」の如しとなして居る（『ある一生』）。要するに彼の小説中の彼の哲學は、稍々簡單ではあるがかなり痛烈な所がある……。（以下中略）。

そしてこれはまた『モン・トリオール』に於けるクリスチアーヌの苦しみである。この實利的な金融業者の若妻は、夫を嫌つてはしないが、愛しもせずにあつてゐるうちに、非常に利己的なポール・ブレティエ某に遇つて眞の熱情を知り出す。某はすぐに彼女を捨てる。この某に遇ふまでクリスチアーヌは孤獨である。彼女は人を愛し得るが、その愛情を持つてゆくべき人を見出さなかつたから、次に出す一節には優しくも悲しいところがある、「クリスチアーヌは森の中で迷つたやうに、泣きたくなつてしまつた。彼女は手摺に眩をついた。空氣は清々しかつた。大きくて又、虚しい天には、遠く月が、ひとり淋しやうに、いま、夜の青味を帯びた高い所に上つて、木の葉の茂りや山々にそのつれない光を注いでゐた。あたりはどこも眠つてゐた……そしてこの淋しい天にぽつねんとかかつた光、又、夜のしじまの中にあてもなく聞えるこの弱い音は彼女の心に非常な孤獨の感を起さしめ、彼女は終に噁り泣き出してしまつた。彼女は恐ろしい病にかかつた人のやうな苦惱と、恐ろしさに骨の髄まで戰いた。そして彼女は突然自分もこの世にひとりだと氣がついた……おお、何と彼女は獨りであり、失はれたことを感じたのであらう！」

註（一）彼女の聽いてゐるヴィオロン。

然し、この孤獨も彼女が一度ブレイニーのものとなつて苦しんだのに較べれば、まだまだである。かくて彼女は男女の仲には深い嘘のあるのを見てとる。そして、以前の如く束の間の孤獨感ではなくなつて、あらゆる愛の下には孤立が隠れてゐることを思考し始める、「彼女は自分がこの世にすっかり見放されたのだときめてしまつた。彼女はあらゆる人間は事件に際して列んで歩いてゆくだけで、二つの存在を眞に結び合せるものはないのがわかつた。彼女はすっかり信頼してゐた人の裏切つた事のために、他人は、計り知り難き明日から明日への、或は長く、或は短く、或は楽しく、或は悲しい人生の旅で出遭ふ縁なき隣人であるに過ぎないと感じた。彼女はこの男の腕の中で、彼と一緒にゐる、その中に入つて行つたと思つた時、又、二人の心身が一つの心身となり了つたと信じ切つた時ですら、二人は、やや近づいて、神祕な自然が人間を一人一人別に作つて包んで置いた如何ともすることの出来ない外包に一寸觸れたのに過ぎないのがわかつた。人生に於ける存在をして天空の星の如くに互ひに遠いものたらしめたこの目に見えぬ柵は何物も破ることが出来なかつたし、今後もし出来ないのがわかつた。彼女には世界の初めからの絶えざる無力な努力、包装を破つて、中で、永久の囚はれ者、永久に孤獨な人間の魂がちたばたしてゐるのを救ひ出さうとする努力が続けられてゐるのを知つた」。(以下略)。

この數行は特に戀愛に關してゐるけれども、又あらゆる我等の感情及びあらゆる人生に對する哲學がそこに見られる。モーパッサンは『ある一生』の中で、夫婦の愛と母性愛の二つの幻影に欺かれた女の慘澹たる生活を示した。彼女は母として、妻としての夢に欺かれた。恐らく祖母として持つ希望にも欺かれよう。ここで終るこの書は精神的孤獨の悲しい印象を残してゐる。

私がここ迄引用したのは、作者にして精神的孤獨が一つの哲學的組織、一つの人生の見方の如きものとなつてゐるもののみであつた。然し同じ感情のしるしは多くの他の人にも見出し得るであらう。精神的孤獨が多少とも今世紀の人心及び作物に混入してゐることを示すために、尙二三の名を挙げよう。

パンジャマン・コンスタンはその小説『アドルフ』の中の數ページに、破局の後に來る心の苦しみではなく、破局の近いのを感じて、やがて襲ひ來る孤立を恐れる氣持を譯してみせた。之は奇異にも利己主義に似た、變つた心持で、破局をこちらから願ひ、持ちかけるくせに、マダム・ド・スタールが望んだやうな（『デルフィヌ』）世間の承知しない戀愛關係を平氣でなしとげる程の勇氣もないのである。「束縛を受けずひとりで横切りたいとあれほど度願つてゐた世間といふ沙漠の中に、私はやがて彼女無しに生きてゆかうとしてゐた。私は自分を愛して呉れた女を滅茶滅茶にしてしまつてゐた、倦むことのない愛で以てどこまでも慕つてゐて呉れたあの心、私の心の伴侶を、滅茶滅茶にしてしまつてゐた。すでに孤獨感が私を襲つてゐた、エレノールはまだ生きてはゐたが、もはや彼女に私の考へを打ち明けることは出來なかつた。私は既に地上でただひとりであつた。私はもはや彼女が私の周圍に擴けてゐて呉れたあの愛の雰圍氣の中に生きてゐなかつた。呼吸する空氣は一入ざらついて見え、出遭ふ人々の顔はひとしほ冷淡に見えた。全自然は私にこれつきり永遠に愛されなくならうとしてゐると告げてゐるやうに思はれた。……もう愛されてはゐないのであつた、あらゆる人々にとつて他人なのであつた」（大塚幸男譯）。同じく後に挙げる（第一章「優れた人について」）あの驚くべきジュリアン・ソレルに於ける精神的孤獨の叫び聲も亦注目すべきである。ボードレ

ールはいくつかの詩（「信天翁」「祝福」）の中にヴィーの特意な、人々からは嫌はれ、地上の流涕人の如く自己を感じてゐる詩人の孤立をとりあけてゐる。そして彼は戀愛に於ける孤獨（「告白」）、死んだ人々の孤立（百二十四、「大いなる心の下婢」等）、地平線のかたに生かしむる希望と想像との喪失（「虚空の味」）等の或るテーマを採用してゐる。もつと最近の作の中には十九世紀の人心に孤獨感が徐々に透滲してゆくのを示したものがあつて、即ちアロークール氏の『赤裸々な心』、アナートル・フランス氏の『紅き百合』中の數行、ポール・マルグリット氏の幾ページがそれである。マルセル・ブレヴ氏は此の思想を以てその小説『秘園』（一八九七年）の主體となした……「何故、今初めて、娘も亦私とはちがつた考へを有する者、私にはわからない祕密を有する者であることが、私にはわかつたか？……この他人の生活の神祕、我々の思考や生活に觸れたりする他人の思はくの神祕、今迄にこれがかほどに堪へ難い壓迫を私に加へた事はなかつた。これは到る所、我等の周圍、凡ての心の中、凡ての眼の中にある……我々でないものは皆、我等に對して、その祕密を持つてゐる。私は困窮してこの世にひとりである。みなひとりである。「私はひとりでない」と云つてゐる者はさう思つてゐるだけである。私は昨日かうであつた。いまは少くとも私は私の孤獨を友に生きてゆかなければならないと知つた……凡ての魂は一つの秘園をもつ。」

註 (一)

この叫びは純然たる利己的のものである。アドルフは愛することが出来ない。それに愛されても幸福でない。彼は決斷の出來ぬ男、習慣と與論の奴隷である。彼は利己主義である、彼にはエレノールの愛は眞面目な縁ではなく、鎖である。私はこの書の中に凋落してゆく愛の描寫を見出し得ない。といふのはアドルフは、嘗て心から執着したことが無いからである。彼は有頂天にならうともしなかつたから、エレノールを得るとそれを告白してゐる。即ち「時間になつた……などと考へないで……ただ自發的に彼女の傍にゆくことが出來たら、私は一段の樂

しさを味つてゐたであらう……けれども私は、弱い、恩を知る、そして女に壓された男に過ぎなかつた。何ら心から迷る衝動に支へられてはゐなかつた。……私たちは矢鱈に愛撫し合ひ、愛を語つた、だが愛を語つたのは、ほかの事を語り合ふのが恐かつたからである。……愛して愛されないのは恐ろしい不幸である。けれどもはや愛してゐない女から熱烈に思はれることは實に大きな不幸である。」エレノールは彼にいふ、「あなたは愛を持つてゐると思つていらつしやるけれど、本當はお情だけなのですわ。」

(二) 「マルタン伯爵はいふ、ポール・ヴァンス氏は魂と魂は通じないと知つて苦に病んでゐる。彼は考へる時も、書きものをする時も、ひとりといふ氣持になる。何をしても、人はこの世にひとりである。これが彼の意見である。それは尤もである。人間同志はわかつたやうで、決してわかつてゐない。」

(三) 例へば下の數行はモーパッサンを思はせる。「身をかがめて、彼は彼女の頭をかかへてぢつと眺めた。暮れゆく日の下、彼はその妻の瞳に、鏡のやうに自分が映るのを見た。……何故彼は、此の美しい褐色の目の奥まではひれないのかしら? 何故、彼女を知らうとしてゐるのに、この鏡の中で出會つたのは、自分自身なのであらう? ……」彼は互ひが千里も離れて居り、その魂を合はした時ですら、二人で決して一人になれないを感じた……

〔試練の日〕

同じ感情は佛蘭西以外の國の或る作品の、特に佛蘭西思想に刺戟された作者のものの中に見える。之等には非常な獨創的なものはない。とはいへ獨逸の詩人レーナウの非常に美しい哀歌がある。(「詩」一、二)。

「お前は既に、愛も神もなく、曠野に、耻を知らぬ不幸の傷を、傲れる沈黙と無殘にも人に知られぬ苦しみとに包んで、たつたひとりなのか? あらゆる快活な希望は、恰も獵師にとつて山の頂で犬が失はれて吠え聲が消え、又冬を避けて鳥がゐなくなつたやうに、お前にとつては消滅してしまつたのか? 若しお前が曠野に一人であつたなら、如何なる力に押されて岩をつかんで、腕に押しつけ、又自己の孤獨に驚き無情の岩に恐れをなして轉じて苦しむ腕を

風にさしむけるかを知つてゐよう。風はエトランジである。汝にはつかめない。石は死んでゐる。冷くさらさらした石に慰めの言葉を求めても無駄である。お前は見捨てられたと感じる、薔薇の傍でも。薔薇はやがて、お前のことなどは知らずに、ただ自らの死にのみかはつて、色がさめてゆくのが見えよう。もつと進んでごらん、色々のものが通り過ぎる長い暗い道で、お前に挨拶したものは、どれもこれも絶滅してゆく。ここかしこ、廢屋から視線が出てゐるが、やがて窓がお前の見てゐる前で閉まり、廢屋はくづれ、お前は驚愕を覺える。愛もなく、神も無い。道は忌はしく、通りの突風は寒い。そしてお前は……宇宙全體は、やけに悲しい。」

ジネーヴの人アミエルの日記はこの研究に役立つ。その一八五六年十月二十七日の項にかうある、「我々は常に孤独である。我々の本當の歴史はいつになつても他の人からは殆ど讀み解かれることがない。この悲劇の最も優れた部分は獨自である。……涙、悲しみ、あてはづれ、侮辱、悪い考へ、いい考へ、決心、不決心、熟慮、すべて我々の祕密である。その殆ど全部は、たとひ我々がそれを話さうとしても書いて見ても、通じやうがないし傳へることが出来ない。我々自身の一番大事なところに決して現れることがない。親密な間柄に於ても出口を見出さない。我々の意識にも確かに一部分しか出て來ない。殆ど祈のうちにしか活動を始めない。恐らく神によつてしか拾ひ上げられないであらう。といふのは我々の過去は我々にとつて永劫に他人だからである。——我々のモナドは他のモナドから〔奇蹟的に〕影響を受けることがある。しかしそれでもその中心までは他のモナドの影響が及ばずにゐる。そこで我々自身は結局我々自身の神祕の外に留まる。」(河野與一譯)。

目を露西亞人に轉じると、トルストイは『アンナ・カレニナ』の中で「私は常に私の魂の聖堂と他人の魂、私の妻

のそれすらもの間に一つの柵を感じるであらう」といひ、ツルゲニエフは「他人の魂とは、暗い森です」（『貴族の巢』）と云つてゐる。デンマーク人ヤコブセンは「物の奥には人間は常にひとりであるといふ悲しい眞理があつた。魂の融合といふのは嘘に過ぎない。何物も決してすっかり自己を與へてくれない。諸君を膝の上に抱き上げる母親も、あてにする友も、君の傍に眠る妻も……」と書いてゐる。これにはモーパッサンの影響がある。尙モーパッサンの影響はイタリヤ人ダンヌンチオの數頁の中にも見られる。

註 (一)

小説『生と夢との間』レミザ夫人譯（巴里評論、一八九八年一月一日）。同じ小説に於けるニイエル・リーネの魂の解剖を見よ。「彼は全くひとりになつた、もはや親類もなければ、その心に親しい友もなかつた。けれども更に大きな孤立が彼の上に襲ひかかつてゐた……彼の才能は到るところ何時でも彼に従ふとは限らなかつた。彼はその意見、その確信、その共感で自らを養つてはゐなかつた……彼はそこから深い落膽を覚えるのであつた……なぜなら人はその作品と同化することが出来る筈だと彼は信じてゐたから。」

(二)

『死の勝利』の中に於て。これは構成が悪く、非常に混雜して統一がなく、心理描寫が極めて貧弱で、モーパッサンとゾラとの影響の見える抒情的長篇小説である。しかしこの作品は官能的なもの（音楽と匂ひとの重要性、愛の陶醉）によつて價值が（しかも甚だ）ある。——孤獨感については、就中發端の、イボリートに對するジョルジュの次の告白を見よ。「お前は僕にとつては知られざる女だ。他のすべての人間と同じく、お前は僕にははひれない一つの世界を内にもつてゐて、どんな情慾を以てしても僕はそれに近づくことは出来ないだらう、お前の感覺、お前の感情、お前の思想の一部分しか僕は知らない。言葉は不完全な伝へだ。魂は傳へられない。お前の魂を、お前は僕に與へる力はない。陶醉の法悦境にあつてさへも、僕らは二人だ、いつでも二人だ。隔てられ、他人同志であり、心は孤獨な二人だ。僕はお前の額を接吻する、然もこの額の下には僕に向けられたのではない考

へが恐らく動いてゐる。僕はお前に話しかける。然し僕の文句の一つは、僕との戀の思ひ出でない他の時の思ひ出を恐らくお前の裡に目覺まさせる。一人の男が通り過ぎ、お前を眺める。するとお前の心の中ではこの小さな出来事が何かの感動を産むのだが、僕はそれを捉へることは出来ない。そして僕は現在の瞬間がお前にとつては、お前のこれまでの生活の反映で照らされるのでないかどうかをいつになつても知らない……僕はお前の傍にゐる、僕はお前がゐるといふだけで、時として感じるえもいれぬ幸福に浸される氣がする、僕はお前を愛撫し、お前に話し、お前の言葉をきき、身を投げ出す。一舉にして一つの考へが僕を凍らせる。僕は氣がつかなくなつたが、むかしお前が覺えたことのある感じの幻をお前の記憶に蘇らせたのではなかつたらうか……お前と僕との間の何か知らない一致の錯覺的な感情が僕に與へてゐたあの熱情は一舉にして消える。お前は逃げ去り、僕には近づけないものとなる。かくして僕は恐ろしい孤獨の中にひとり止まる。むつまじく暮した十月や二十ヶ月は、もはや何の役にも立たない。お前は僕がまだお前を愛してゐなかつた時分と同じく縁のない女に見える……かくて、かういふ時こそ、心の力が無益にも慘めに使ひ果されるあの永い苦しい沈黙が僕らの上に落ちるのだ。僕はお前に訊く、「何を考へてゐるのだい」とするとお前は答へる、「あなたは何を考へていらつしやるの？」僕はお前の考へを知らず、お前は僕の考へを知らない。刻々に溝は掘られてゆき、それは淵のやうな深さになる……」 (Hivelle譯)

x

x

x

以上の引例により、十九世紀には、大體三つの孤獨の形式があつたことがわかる。

十九世紀人の或る者は、他人なしで暮してゆけると考へたため、社會に於て孤立の味を嘗むるに至つた。傲慢で自己を他と異つたものと感じたり、信じたり、獨立の望みを果しなく持つて見たり、ルソーの夢、「小さな木の一角

を廻はす」ことが出来ると考へたりしたことは、それ等の人々を驅つて一種の流謫の中に隔離してしまつた。その流謫は初めこそ勝ち誇つたものであつたが、次第に悲しいものになつていつた。

又或る者は、人々から離れて、神や、自然や、慰める婦人にその誠を披瀝した。これらの人々は生命の形式や、失はれた文明に關心を持つた。こゝでも亦彼等の「同情」は「孤獨」に終つてゐる。

最後のものは、外界を輕蔑し自分自身にのみ同情を向けんと決心した。即ち絶えずその感情と夢を變へてゆく際に彼等の魂がとり得る多様な形式に同情を向けるのである。彼等は世界に感動の諸動機を求めて、例へば女によりも愛に興味を抱いた。然しその感動、その夢、その思想は、恰も彼等が身を落ちつけることの出来ない對象と同じく、彼等自身の性質に縁なき客として、心や頭腦の中を通り過ぎて行つたりした。かくて自らを前にしての各人の孤立、精神的孤獨の最も近代的な形が生れた。

この三つの形式の孤獨は屢々浸潤し、交錯し合つてゐる。その連續には何等論理的なところが無い、單なる分析の手段である。それらの各々によつて示される考察は次の如くである。但し、尙も非常に一般的に作られる次の定義には敢て固執するものでない。「精神的孤獨とは、各個人はその我の裡に閉ぢ込められた者の如くであり、凡て存在するものは彼のはひれないものであるのが、痛ましくも確信されたものである。だからこの孤獨は、あらゆる時代の人々の知るところである、親しさと雖も事情によつては突然破れることがあるとの信念を假定する一時的な孤獨の印象とは全く異つてゐる。」

(序文終り)